

サン・テグジュペリ著「人間の土地」新潮文庫 新潮社 1955年4月10日刊を読む

## 人間の土地

1. ぼくら人間について、大地が、万卷の書より多くを教える。理由は、大地が人間に抵抗するがためだ。人間というのは、障害物に対して戦う場合に、はじめて実力を発揮するものなのだ。もっとも障害物を征服するには、人間に、道具が必要だ。人間には、<sup>かん</sup>鉋が必要だったり、<sup>すき</sup>鋤が必要だったりする。農夫は、耕作しているあいだに、いつかすこしずつ自然の秘密を探っている結果になるのだが、こうして引き出したものであればこそ、はじめてその真実その<sup>ほんぜん</sup>本然が、世界共通のものたりうるわけだ。これと同じように、定期航空の道具、飛行機が、人間を昔からのあらゆる未解決問題の解決に参加させる結果になる。
2. ぼくは、アルゼンチンにおける自分の最初の夜間飛行の晩の景観を、いま目のあたりに見る心地がする。それは、星かげのように、平野のそこここに、ともしびばかりが輝く暗夜だった。
3. あのともしびの一つ一つは、見わたすかぎり一面の<sup>やみ</sup>闇の大海原の中にも、なお人間の心という<sup>きせき</sup>奇蹟が存在することを示していた。あの一軒では、読書したり、思索したり、打明け話をしたり、この一軒では、空間の計測を試みたり、アンドロメダの星雲に関する計算に没頭したりしているかもしれなかった。また、かしこの家で、人は愛しているかもしれなかった。それぞれの<sup>かて</sup>糧を求めて、それらのともしびは、山野のあいだに、ぼつりぼつりと光っていた。中には、詩人の、教師の、大工さんのともしびと<sup>おぼ</sup>思しい、いともつつましやかなのも認められた。しかしまた他方、これらの生きた星々のあいだにまじって、閉ざされた窓々、消えた星々、眠る人々がなんとおびただしく存在することだろう……。
4. 努めなければならないのは、自分を完成することだ。試みなければならないのは、山野のあいだに、ぼつりぼつりと光っているあのともしびたちと、心を通じあうことだ。

P7～8

### <コメント>

「星の王子さま」の作者でパイロットのサン・テグジュペリの名作「人間の土地」。「夜間飛行」とともに是非ご一読を。

— 2018年1月4日（木）林明夫 —